

氏名	森 梅 代 もり うめ よ
学位の種類	理学博士
学位記番号	論理博第597号
学位授与の日付	昭和53年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	Sociological Study on the Multi-level Society of Gelada Baboons (<i>Theropithecus gelada</i>) (ゲラダヒヒの重層社会の生物社会学的研究)

論文調査委員 (主査) 教授 河合雅雄 教授 川村俊蔵 教授 大沢 濟

論文内容の要旨

主論文は、エチオピアのセミエン地方の高地(3600~3960 m)に生息するゲラダヒヒについて、全個体を完全に識別した2ハード(139頭)を主な対象とし、他の2ハード(約520頭)を副対象として連続観察を行い、ユニットの内部構造と成立要因、ハードの統合機構を明らかにしたものである。

クルックらは、ハードはユニットの任意の集合であるとしたが、申請者は、ハードはメンバーシップをもったユニットの統合された集団であり、ユニットの上位社会集団であることを解明した。ハードを形成するユニット間に優劣はない。おとなどうしの親和的な相互交渉はほとんどなく、ユニットの独立が明確に維持されている。以上のことを社会行動や個体間距離などの社会関係の分析から明らかにし、ハードの社会構造を論じた。つぎに、ユニット内の社会関係をリーダーと雌、雌間について量的質的に分析した。ユニット内の雌間には明確な順位がある。リーダーは最優位の雌との間に特に強い親和関係をもつ。他の雌たちとは、ほぼ同等な関係をもつ。また雌どうしは独自の社会的結合により統合されている。このような事実から、リーダーと雌たちの相互牽引による社会関係のダイナミクスを分析し、ユニットの統合性についての仮説を提出した。ユニットには、しばしばリーダー以外のセカンド雄とよばれるおとなの雄が存在する。その雄の社会的役割、出自、雌との関係を分析した。これらの雄は性的行動を行わないので、複数雄の存在にもかかわらず、ユニットは繁殖単位集団としては、ワンマイル・ユニットであることを明らかにした。

横断的観察をもとにして、雄と雌の社会的成長の全体像をとらえた。雌は一生を同一ユニット内で過すが、雄は一生のうちいくつかのステータスを変遷する。少年期の前後期、ジュニア・フリーランス、雄グループ、シニア・フリーランス、セカンド雄、リーダーの7つのステータスに分け、各ステータスにおける社会的役割と行動型を述べ、雄の一生の社会的地位の変遷の模式図を提示した。

リーダーと他のおとな雄との力の均衡が破れると、リーダーの交代やユニットの分裂が生起する。その社会的過程を分析すると共に、新リーダーと雌の間の紐帯の形成について述べた。つまり新しい雄の

接近に対して雌は性的受容をもって迎え、雌が一斉に発情することによって、雄・雌間の結合が強化され、定着する。生殖行動は年中見られるが、性行動の発現には社会的要因が強く作用していることを指摘し、また性行動を四段階に分け、行動学的分析を行なった。最後にゲラダヒヒの社会を総括し、マントヒヒ社会と比較考察して、両種におけるワンマイル・ユニットの成立要因と社会組織の差異を論じた。

論文審査の結果の要旨

霊長類の一つの種についての社会学的研究に関するモノグラフは少ない。申請者は、エチオピア国のセミエン高地で野生ゲラダヒヒを対象に社会現象を包括的にとらえ、多角的な問題設定のもとにゲラダヒヒ社会のモノグラフの作成を試みたが、その意図は成功したとみてよい。

完全に個体識別した2ハード(139頭)を主対象にし、他のハード(約520頭)を副対象にして、徹底した連続観察による研究は、ほとんど個体識別をなしえずに行われたクルックやダンバーの研究に比し、精度と確度と内容の豊富さにおいて著るしくすぐれた成果を産出した。現象の記述、その解釈、社会関係の数量的処理についても明快で見事であり、各章にわたって独創的な発見や見解が随所に見られる。たとえば、ハードはワンマイル・ユニットの任意の集合であるとの従来の説に対し、申請者はユニット間の空間的布置、社会関係等から、ハードがユニットから構成される上位社会集団であることを明らかにし、重層社会の構造を解析したこと、ユニット内部の社会関係と分裂と生成の解析からユニットの統合のメカニズムについて仮説を提出したこと、雄と雌の社会的成長の全体像をとらえたが、特に雄の社会的役割と地位の変遷についてのモデル化を試みたこと、などがある。これらはダンバーらの結論や仮説とは異なった結果に到達しているが、申請者の結論の方が客観的であり妥当であると思われ、全般にわたって高く評価される業績となっている。

最後に同じ重層社会を形成するマントヒヒと対比して討論を行ないゲラダヒヒの社会構造論を展開し、霊長類の進化を考察する上で重要な見解を述べている。

参考論文はいずれも霊長類社会の分野での豊富な知識と研究能力を有していることを示している。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。